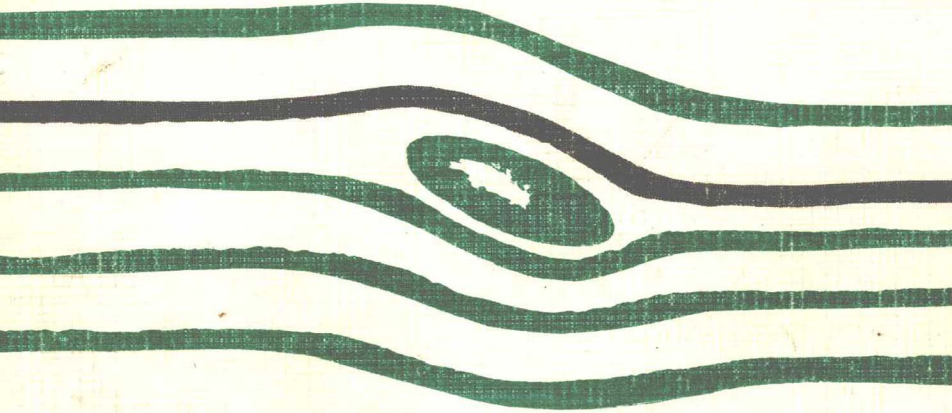
大和物語の人々

雨海博洋
山崎正伸 著
鈴木佳與子

笠間選書 116



雨海　博洋（あまがい　ひろよし）
1951年　二松学舎専門学校を経て早稲田大学第一文学部卒。
現　在　二松学舎大学教授
現住所　〒146　東京都大田区池上4—28—7
山崎　正伸（やまざき　まさのぶ）
1978年　二松学舎大学大学院博士課程修了。
現　在　二松学舎大学文学部助手
現住所　〒223　神奈川県横浜市港北区綱島西5—20—4
鈴木佳與子（すずき　かよこ）
1979年　二松学舎大学大学院博士課程修了。
現住所　〒158　東京都世田谷区東玉川1—4—15

笠間選書116　大和物語の人々
昭和54年3月24日初版第1刷発行
定価 1,500円　—検印省略—
著者　雨海博洋©
山崎正伸
鈴木佳與子
発行者　池田猛雄
印刷　大文社
製本　笠間製本所
発行所　有限会社笠間書院
〒101　東京都千代田区神田神保町1-46
電話03-295-1331(代)　振替東京1-56002
書籍コード　1391-953116-0924

大和物語の人々

雨海　博洋
山崎　正伸　著
鈴木佳與子

笠間選書 116

笠間書院

『大和物語の人々』目次

一部

としこ……七
南院の今君……二七
右近……四七
大輔……七〇
修理の君……八九

二部

桂皇女……一〇九
小弐命婦……一三一
『大和物語』作者試論……一四一

三部

先帝……一六七
一条の君……一八六
武蔵守女と若狭の御……二〇七
染殿内侍……二二九
あとがき
所収論文一覧

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一部

鈴木佳與子

とし子

平安時代ほど、女性が文学に活躍した時代は今日までない。その代表に、紫式部とか清少納言とかが挙げられるが、その文学的地位が確立されたのは、そのもとで、大勢の女性が作者として、また読者として、ピラミッドの底辺をつくってささえていたからである。このような、文学の荷い手ではあるが、大きな作品を残さなかった女性の方がはるかに多かったはずである。そういう女性達については、資料も少なく詳らかでないが、このような女性をぬきにしては、平安女流文学の隆盛は極められなかっただろう。ここに、平安女流文学を研究していく上で、このような女性を探っていく意義があるのである。

大和物語は、首尾一貫した物語（ストーリー）ではなく、歌語りと言われ、ある時、ある場所、ある事柄についての和歌や言動に関するエピソードが語られたものが、作品としてとられたものである。ここでは、誰と誰の話ということに強い興味が持たれていて、いろいろな人物が登場してくる。この中には、家集などの作品を残したわけでもなく、勅撰集などに数首その詠歌が載っている程度の、ピラミッドの底辺部分にあたる女性が大勢いる。

今、そこから女房では最多の登場章段数を持つ、とし子という女性をとり上げてみる。とし子は、大和物語の三・九・一三・二五・四一・六六・六七・六八・一二二・一三七段の一〇章段に登場して

くるが、この登場章段の数の多さだけでなく、たとえば、としこという名称など、他の女性とは違った面を持っているのではないかと思われる所が諸処にあり、としこがどの様な人物であったか非常に興味が持たれるのである。としこについては、諸先学が既に論じておられるが、私なりに考えてみたいと思う。

としこについての説明は、『勅撰作者部類』に、「肥前守藤原千兼妻。」とあるくらいで、他には、歌集にとしこという名で出ているが、詳しいことは明らかではない。まず、いつ頃の人であったか考えてみたい。

大和物語でとしこと共に登場してくる生没の分っている人を参考に挙げると、

源　清蔭　元慶八（八八四）年～天暦四（九五〇）年

藤原仲平　貞観一七（八七五）年～天慶八（九四五）年

元良親王　寛平二（八九〇）年～天慶六（九四三）年

のようになり、凡のとしこの生きた年代が浮んでくる。

角田文衛博士[注1]は、歌集や大和物語の話の内容から、としこの活躍時期を、延長から天慶にかけての頃とされ、四一段を延長末（九三〇）年か承平初（九三一）年、長女あやつ子を、二〇歳以上であろうと推定され、そこから、としこと千兼の結婚を遅くとも延喜八・九（九〇八・九）年頃とみておられる。そして、承平年間に、四一・二歳で亡なったと推定なされている。角田氏の、四一段が延長末年か承平初年となるというのは、醍醐天皇が延長八（九三〇）年に亡なり、女御和子が承香殿を引き払う

まで、としこがそこに仕えていて、四一段は、まずそれ以降の話であろうということから推測したものだと思われる。そうすると、角田氏の、としこが四一・二歳で亡なるというお考えからすると、四一段は延長末年かその翌年になるわけであろう。しかし、これは角田氏の規定上のお考えで、四一段の話は、としこの存命中であればその範囲は広がってくるので、この二年に決められないと思う。また、あやつ子を、「二十歳以下では清蔭の話相手にはならないから、この長女は延喜十年以前に生まれたに相違あるまい。」とされているが、二十歳より下でも、大人の話を理解できるだろうし、情趣を解することもできると思われる。

としこの没年は不明であるが、大和物語成立以前に亡なっていることは明らかである。『本朝世紀』の天慶五（九四二）年四月二七日の条には、「散位従五位下藤原千兼」とあり、当時は父母が亡なった時には職を辞し[注2]、一年喪に服すことが定められており、妻の場合は三カ月服するようになっている所から、この時に千兼の身近な人が亡なったことが考えられる。父忠房の死は延長六（九二八）年で離れすぎているので、この散位は、千兼の母か、もしくは妻のとしこのためと考えられる。ところが、『西宮記』には、「妻服不出假文」の例があり、実際に妻の喪のために散位になったという記録もみられないので、ここではやはり千兼の母陰陽亮帯女が亡なったためと推測されるのである。ところで、としこを大体寛平八（八九六）年頃生まれたものとすると、天慶三（九四〇）年には四五歳くらいになる。十三段から、千兼がとしこを愛してくらしているうちに亡なってしまったので非常に悲しんでいることがうかがえるが、まだ死ぬような年齢でないのに亡なってしまったような痛々しさが感じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

られる。従って、としこも千兼の母が亡なった天慶四・五（九四一・二）年、四五歳頃には亡なったものと思われる。この年齢推定で考えると、三段の延長四（九二六）年には三一歳、九段の延長六（九二八）年には三三歳となり、四一段を仮に醍醐天皇崩御のすぐ翌年としても、としこは三六歳、長女あやつ子を二十歳の時の子供としても十七歳となり、四一段の話には差し支えないものと思われる。

さて、これを、としこと同輩の女房で、仲のよい一条君の年齢と比べてみたいと思う。一条君の父貞平親王[注3]は、清和天皇の第五皇子である。第四皇子貞保親王は貞観一二（八七〇）年に生まれ、第六皇子貞純親王は貞観一五（八七三）年に生まれている。三人それぞれ異母兄弟であるから、同じ年に生まれる可能性もあるのだが、ここでは間をとって、貞平親王の誕生を貞観一四（八七二）年とする。一条君は、伊勢御との交際もあることから考えると、貞平親王の若い頃の子供ではないかと思われ、大体寛平二（八九〇）年頃の誕生と推定されるのである。一条君と、としこの年齢の開きは七歳となるが、これは伊勢御と一条君の年齢差と比べると狭く、二人が仲のよい友達同志であるのに差し支えないと思われる。この一条君の年齢を考え合せても、としこの、寛平八（八九六）年頃の誕生というのは、妥当性あるものと思われる。

としこの生きた年代は、以上のようになると考えられるが、次にとしこの家について考えてみたい。としこや念覚の系図は明らかでないので、どのような人が一族にいたのかわからないが、千兼の家から、としこがどの様な家柄なのかある程度推測できると思われる。

千兼は、『尊卑分脈』に、「従五下　哥人　肥後守」とある。父忠房は「哥人　楽道長　作胡蝶仁也

延喜十六(九一六)法皇御賀之時楽行事」となっており、祖父興嗣も「琶琶上手　仁寸元勅自貞敏手傳比巴曲」とあって、音楽関係にすぐれた家系であったようである。千兼については、『醍醐天皇御記』の延喜一七(九一七)年三月六日の条に、「讃岐掾千兼彈二琵琶一」と、花宴に琵琶を奉仕したという記事があり、その血を受け継いでいる人であった。このように、千兼の家は位は余り良くはないが、風雅な家柄である。そのような家と交りがあって二人が結ばれたのであろうから、としこの家も同程度の家であろう。六七段から、としこの住んでいる家が粗末であることがわかるので、経済的にはそれ程豊かではなかったようである。一方、としこの兄念覚が二五段に登場してくるが、ただ「念覚といふ法師」[注4]としているだけで、位を持っていない普通の僧だったようである。四一段には、としこの娘まで出てくるのであるから、としこに俗人の兄弟がいれば大和物語に登場してきて然るべきなのであるが、見当らない。となると、兄弟は念覚一人で、位の明記されていない僧であり、『僧綱補任抄出』『僧官補任』等にも記載がみられないところから、ここでもとしこの家柄が低かったことが推測できるのである。しかし、念覚は、皆を感動させる歌を詠んでいる上、としこ自身歌人として名の通った人であったので、和歌を能くする風流な家柄とも考えられ、千兼の家と通じる所があったと思われる。

としこと千兼の結婚は、角田氏は遅くとも延喜八・九(九〇八・九)年頃とみておられることを述べたが、私の年齢推定では、その時のとしこの年齢が十三・四歳になってしまう。当時は若年で結婚することもあったが、もう数年ずらした方が一般的であろう。いずれにしても、四一段の大きくなった娘がいる状況から察すると、としこは若くして千兼と結婚したようである。

内容を見てみると、六六段でも六七段でも夜千兼を待ちわびていて、来ないことに対して歌が詠まれているのであるが、両段の歌とも、来てくれないことへの恨みなど全く入っておらず、としこの千兼を愛しただひたすら待っている気持を素直に表わしたものである。六七段では、自分が雨漏りのするこわれかかった家に住んでいながらも、

君をおもふひまなきやどゝおもへどもこよひのあめはもらぬまぞなき

と詠み、雨にはばまれてやって来ないことを責る気持は全く感じられない。かえって自分の愛情の不足を述べ、私があなたを思う心にすき間があったのでそのすき間から雨が漏ることだと、千兼に対する思いやりさえうかがえるのである。このように詠んでこられれば、千兼の方がすき間をうめてやろうと自然に思ってしまうような歌である。二人の間の睦じさが推しはかれる。その通りに、「こどもなどあまたいできて、おもひてすみけるほどに、なくなりにければ、」と一三段にあるように、夫婦中は円満で、としこが亡なるまで結婚生活は続いているのである。

ところで、千兼には、先程の讃岐掾の記録があるが、これは京都にいたのであるから遙任である。『尊卑分脈』には、肥後守の記録があるが、角田氏[注1]は、これを天暦元(九四七)年以降の任命とされ、「恐らく千兼は、外任は一度くらいの経験で、後は諸寮の頭などに在任し、専ら琵琶を通じて宮廷生活に寄与していたのであろう。」とされている。千兼が肥後の守となったのは、としこが亡なった後のことで、としこが生きている間は、地方へ下ったことはなかったと思われる。従って、としこが亡なるまで、二人は仲睦じく暮していたようである。ここから、としこの、千兼以外の男性との関係を

恋愛関係と捉え難いものを感じさせる。

では、千兼以外に交際のあった人々との章段を見てみよう。六八段は藤原仲平がとしこの家になれなれしく柏木を採りに使いをよこしてきたのをあやまらせた話であるが、『後撰集』[注5]の同歌の詞書には、「千兼があひしりて侍りける家に」とあり、千兼がはっきり意識されている。段の配列からみても、千兼が裏にいることは明らかである。仲平ととしこは、恋愛感情が入っていない普通の交際であり、それを越えた態度に出たので注意したのではないかと思われる。

元良親王は、「いみじきいろこのみにおはしければ、よにある女のよしときこゆるには、あふにもあはぬにも、文やり哥よみつゝやりたまふ」[注6]といわれた有名な風流貴公子である。大和物語では一三七段にとしこが元良親王に歌を詠んだ話があるが、大和物語には他に、修理君（九〇段）中興女（一〇六段）女（一〇七段）中納言君（一三九段）舁大納言女（一四〇段）との話がある。

元良親王ととしこの交際がどのようにしてできたのか考えてみると、一三九段に「故兵部卿の宮、わかおとこにて一宮ときこえて、いろこのみたまひけるころ、承香殿はいとちかきほどになむありける。らうありおかしき人〳〵ありときゝて、物などのたまひかはしけり。」とあって、中納言の君と関係をもったことが書かれていて、元良親王は、承香殿に出入りがあったことが判明する。そしてまた、『拾遺集』[注7]雑下に、

元良のみこ承香殿のとしこに春秋いつれかまさるとゝひ侍けれは秋もおかしう侍りといひけれはおもしろきさくらをこれはいかゝといひて侍けれは

510 おほかたの秋に心はよせしかと花見る時はいつれともなし

とあって、としこが承香殿に仕えていて、実際に元良親王と交際のあった一人であったのがわかる。この歌は春秋どちらがよいかという話題から出たもので、ここからは、二人が恋愛関係にあるとはとれない。

一三七段から考えてみよう。元良親王は志賀山越の道の途中の景色のいい所へ、風流な家を建てて志賀詣で通る女性を見たことがわかる。すばらしい女性が通りかかれば、呼びとめて家にひき入れたのであろう。そのようなことを思い、家やまわりの景色の趣き深さに感じて、としこは歌を詠んだのである。このように大和物語からも恋愛関係とはいえない。むしろ、彼等二人とも風雅を解する者で、それによる結びつきから交際していたのだと考えられる。

次に、源清蔭との交際をみてみる。源清蔭は藤原忠房の娘を妻とし、[注8]その間に子供などもあった。忠房は千兼の父であり、清蔭ととしこは義兄妹であったことがわかる。また、清蔭は、醍醐天皇皇女韶子内親王とも婚姻関係にあったが、[注9]韶子内親王の母はとしこが仕えていた承香殿の女御和子であった。としこと清蔭は、このような近い関係にあった。四一段にはまた、「源大納言の君の御もとに、としこはつねにまいりけり。ざうしゝてすむ時もありけり。」とある。ここから、今井源衛博士[注10]は、「少なくとも清蔭の家の女房として、局を貰って住んだこともあるらしい。」とされている。川崎庸之氏[注11]は、としこは「源清蔭と特殊な関係にあった人である」とされ、今井氏もそれを受け、「二人の間に主人と召人の如き恋愛関係の存在を考えねばなるまい。」とされている。

では、大和物語の三段と四一段から、二人の関係を考えてみよう。三段では、としこは清蔭が頼まれた宇多天皇の六十歳の賀寿の捧げ物を作るという所から、としこが召使い的役目を負っていることがわかる。この仕事を終えた翌日、としこが清蔭に贈った、

ちゞのいろにいそぎし秋はくれにけりいまはしぐれになにをそめまし

という歌を今井氏[注10]は、「まさか『何かもっとほかのお仕事を下さい』などと、人の好すぎる注目ではあるまい。時雨で色をふかく染めようか、とは、おそらく男との交情について求める所があるのではないだろうか。」とされている。しかし、六六・六七段で、来ない千兼に少しもいや味の入っていない歌を詠むとしこが、仕事を終えた翌日に、何も言ってこないからといっても、すぐ催促するような歌を贈るとは思えない。いそいでいろいろ染めてあげたけれども、又何かあったらおやりしますわ、という素直な取り方の方が自然のような気がする。この歌は、九月つごもりまでが秋で、時雨月とよばれる十月の冬に移るその変り目をうまくとらえ、秋と冬が合わさった形になっているところに、面白さがあり、更にそこを清蔭がどうとらえるかという面白さをねらって詠まれたものであろう。

清蔭から返事のないまま十二月末になり、としこはまた歌を贈る。

かたかけのふねにやのれるしらなみのさはぐ時のみおもひいづるきみ

わざとくれの忙しい折をとらえて、忙しい時しか私のことを思い出してくれないのですね、と言っている。その中には、相手を批難する気持が入っているが、清蔭に対する甘えも入っている。この甘えも、血縁的に親しい間柄から発生したもので、わざわざ恋愛ととらなくともよいと思われる。清蔭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com